

# 社会主義リアリズム論争ノートⅣ

— 〈国防文学〉と社会主義リアリズム—

下出鉄男

## はじめに

昨年八月のソ連の崩壊によって、二十世紀における「社会主義」運動の幕がひとまず閉じられた今、社会主義リアリズムについて語ることは、どう抗弁してみたところで、アナクロニズムと譏られるか嘲笑されるのがおちだろうと思いつつ、にもかかわらず、とりとめのないこの覚書を続ける理由から始めることにする。

言うまでもなく、我国で社会主義リアリズムが多少なりとも気合いをいれて論議の対象とされたのは、せいぜい六十年代の前半、それもごく初頭までのことにすぎない。吉本隆明は『言語にとって美とはなにか』（1965年・勁草書房）の序でこう記している。

もうかなりまえのことになるが、少数の仲間で行っていた雑誌『現代批評』に、「社会主義リアリズム論批判」という文章をかいたころから、わたしは数年のあいだやってきたプロレタリア文学運動と理論を批判的に検討する仕事に、自分で見切りをつけていた。そこで生み出された少数の作品をのぞいては、この対象から摂取するものがなく、批判的にとりあげることは、いわば对象的に不毛なことに気づきはじめていたのである。（中略）プロレタリア文学運動とその理論の検討という課題は、わたしにとってたんに文学の問題だけではなく、思想上のすべての重量がこめられていたので、ついに自分のやってきたことは空しい作業だったかという覚醒は辛いものであった。

社会主義リアリズムをはじめとするプロレタリア文学の運動と理論の批判的検討にこめられていた吉本の「思想上のすべての重量」や「自分のやってきたことは空しい作業だったかという覚醒」の辛さすらも、現在では、おそらくまともに顧みられることはほとんどあるまい。ごく大雑把に言えば、そもそも本家

のソ連、また本稿の扱っている中国においても、社会主義リアリズムは、時代が下るにつれ、それが提唱された当時の水準を凌駕する如何なる論点も出されぬまま、呪文のように繰り返し唱えられるばかりで、さしたる成果も残さず、やがて社会主義のイデオロギー的統制力が弛緩する頃には、ジダーノフの末裔である党の文化官僚を除けば、誰もがその教義にあきあきし、無残に形骸を晒すことになったのである。社会主義リアリズムを検討することの「不毛」さも、それが提唱された時点以上の内容を持ちえなかったこと（むしろ後退したと言うべきかもしれないが）を誰もが見とどけてしまっただけからは、議論の余地のない自明のこととなった。かかる地点から見れば、プロレタリア文学の批判的検討に見切りをつけ、文学理論の新たな地平に踏み出していった吉本の『言語にとって美とはなにか』から伝わってきた気負いまでもが、些か滑稽に感じられてくるほどである。それでは、中国の社会主義リアリズムの顛末を辿ることに、今でも多少の意味があるとすれば、それは奈辺にあるか。

どんなに強固に見える観念の秩序であっても、激しく動揺し精神に対する拘束力を失い、人々がそれまで彼等の思想と行動を縛りつけてきたその軛を脱して、歩みだす一瞬があるに違いない。しかし、それが往往にして、自分たちがそこから脱したと信じる古い秩序への無意識的な復帰をもって終るか、或は新たな桎梏を作り出してしまうことも否定できない。我々は、いやおうなしに、新旧を問わず、所与の観念の体系に捕われながら思考し、行動することを強いられている。その閉域を踏み越えて思考し、行動することを可能にする契機はどこに見出しうるのだろうか。外部からその契機がやってくる僥倖を期待しえないとすれば、所与の観念の体系の内部でそれを探るほかない。重要なことは、そこに埋没している多くの人々の思考と行動を方向づけている観念の体系にそいながら、その病巣を探り、新たな思考と行動の道筋をつける営みなしに、如何なる飛躍の契機も見出しえないということである。

文学の理論と言うよりは、文学者に課せられた政治的要求であったと評されるように（川端香男里編『ロシア文学史』東大出版会）、確かに、社会主義リアリズムがその体内に新しい文学を育みうる胚芽をほとんど持ちえなかったばかりか、それを政治的に禁圧したことは常識となっている。私もこの常識に殊更異を唱えようとは思わない。だが、社会主義リアリズムの文学概念がどんなに貧しいものであったにせよ、少なくとも中国に限って言えば、嘗てそれによってもたらされた概念を運用しながら、自己を圍繞する現実に風穴をあけようとした人々の営為を貧しいと笑いとばすことは、私にはできない。胡風がその



概念を運用することを通じて切り開こうとしたものはもとより、これまで私が批判的に取りあげてきた周揚に代表される社会主義リアリズム論すらも、功罪を含め、それが持った重みを感じることがなければ、現代中国の思想・文化の直面した問題状況（勿論、ごく限られた一面にすぎないかもしれないが）を忽せにすることにしかならないだろう。中国において、社会主義リアリズムをめぐる論議やその実践が逢着した問題を確認しておくことは、嘗てありえた現実に対する思想的、文学的抵抗の様々なアプローチ及び八十年代に脚光を浴びた思想家、文学者の問題提起の評価を些かなりとも地についたものにする助けとなるはずである。裏を返せば、後者が、前者（社会主義リアリズムのみならず、マルクス主義そのものも問題となるが）の行きあつた袋小路や陥穽との格闘を包みこむものでないとするれば、それは新しがり屋の小賢しい議論にすぎないことになるではないか。

だいぶくどくなつたので、本題にかえることにしよう。今号では、社会主義リアリズムが、三六年にかまびすしく論議された〈国防文学〉論において、組織論及び題材論の面で如何なる役割を果たしたかを一瞥することにしようが、その前に、前号で検討した周揚の〈典型〉論の孕む問題について簡単にふりかえっておきたい。というのは、そこに国防文学における組織論、題材論を方向づける理論的枠組が用意されていたと考えられるからである。

—

周揚の〈典型〉概念の孕む問題は、簡潔に言えば、歴史の〈必然〉的な発展の法則を表現する社会的現象こそ、文学作品のテーマとする値打ちのある（即ち〈典型〉たりうる）題材であり、〈偶然〉的な社会的現象を描くことトリヴィアリズムにすぎないという「文学的真実性」（前掲）などで披瀝された彼の見解の延長上にあつた。その評判がいたって悪いことを承知のうえで、敢えて再度エンゲルスの『自然の弁証法』における「自然科学者」批判を援用して言えば、周揚の〈典型〉概念は、「法則のもとにもちきたすことのできるもの」＝〈必然〉的なものを「科学的に興味のある唯一もの」と考え、「法則のもとにもちきたしえぬもの」を無意味な〈偶然〉的現象として無視する類の悪しき「科学主義」に呪縛されていたのである。この点に関して、「ソ連」の中世史家A・Я・グレーヴィチの論文を集めた『歴史学の革新——「アナル」学派との対話』（栗生沢猛夫・吉田俊則訳・平凡社）に収められた「歴史における

一般法則と具体的法則性」(1965)には、示唆的な見方が述べられている。

グレーヴィチは、ソヴェトの学界において、「可能性、必然性、(合)法則性、偶然性のような史的唯物論の本質的カテゴリーが、それらの歴史への、すなわち、具体的歴史過程の分析への適用という点では、全く不十分にしか検討されていない」ことを批判して、以下のような問を投げつけた。

歴史的必然性は多様性を認めず、せいぜい「規範からの」ささいな偶然的「逸脱」しか許さないものであるとみなせば(個々のできごとが時間的にわずかに遅延、あるいは促進せしめられるにすぎないとか、歴史が求める課題は、現実の歴史においてそれを果たした人物が仮にいなかったとしても、必ず他の英雄が現れてそれを果たすという意味で)、その場合われわれは次のことを証明しなくてはならない。いわゆる偶然性とは現実には互いに影響しあつてつねに均衡を保つものであり、歴史の本質を脅かすような爪痕を残すことはありえないということである。しかし、いったいどのようにしてこんなことが証明されるのであろうか。他方、その反対のことを、すなわちある種の偶然性の総計が「ベクトルの」本質的な「逸脱」を引き起こすと想定してはなぜいけないのであろうか。

あるいは見当違いかもしれないが、グレーヴィチは、前稿で言及したエンゲルスが『自然の弁証法』で記した、ダーウィンをして「生物学においていっさいの合法則性の基礎」とされきた「種の概念」に疑問を抱かせたのは、「個々の種の内部にある諸個体のかぎりない偶然的な差異、それが増大すればついには種としての特徴を破壊するまでにいたる差異、しかもごくわずかの場合をのぞけばそれを生じさせる最も近い原因さえ立証できないような差異」であったという指摘を歴史研究の分野に応用しているように思われる。ここで俎上にのせられていたのは、「われわれは、歴史家の頭脳によって原因であると認定されたもののうち、かれがその意味を把握できないでいるものを称して偶然性と呼んではいけないだろうか。それは、歴史発展を規定する要因のうちで、まさしく歴史家の思考が未だ法則的連関の体系へと組み込むことができない要因にほかならない」という言葉から窺われるように、既知の歴史の必然的な発展法則からは説明のできない、あるいはそれに馴染まない諸現象を(偶然)とか(非典型)的なものとして斥けてその意味を顧みようもしないソヴェト史学の硬直した歴史理論にほかならなかった。そもそも、歴史の法則といったものはその



主体である個々の人間の、それこそ限りない〈偶然〉の行為を通してしか現象しえないし、更に「ある種の偶然性の総計が『ヴェクトルの』本質的な『逸脱』を引き起こす」ことまで認めてしまえば、歴史の法則に叶ったおあつらえむきの〈典型〉的人物などというものは、まったくの戯言にすぎなくなるだろう。周揚の〈典型〉概念に孕まれた悪しき「科学主義」は、理論的には説明のつきにくい様々な具体的事象よりも、歴史の〈必然〉の法則を実体的なものとして看做すソヴェトの歴史科学をとらえてきた錯覚と、その根を同じくしていたと言っている。

周揚は胡風との〈典型〉をめぐる論争において、「『人間の本質は社会関係の総和である』という意味で、人間は集団的人間であり、それぞれ集団的な共通性を具えてはいるが、同一集団の境界の中で、それぞれの人々は、現実の各方面に対して様々な接近や体験の仕方をする。それゆえ、同じ集団的利害の表現者ではあるけれども、個々の人間の性格は異なる方向に沿って発展するのである」（「典型和個性」1936年4月1日《文学》第6巻第4期）と述べ、すぐれて个性的人物であることが、文学的形象としての〈典型〉の表現に不可欠な要素であることを強調したにもかかわらず、それは結局歴史法則という刺身に添えられたつまぐらいの意味しか持っていなかったようである。彼は、続けて同時代の作品から次のような具体例をあげる。

『子夜』の中の呉荪甫は意志堅固で果敢な性格を具えた人物である。この人物は、軟弱、無能、屈服を共通の特色とするかの中国民族ブルジョワジーの集団において、特殊といわざるをえない。しかし、彼の性格の発展、矛盾と結末の彼の悲劇から、我々は中国民族ブルジョワジーに共通の運命を読みとるのである。

あげ足を取っても仕方がないが、右の矛盾の『子夜』のリアリズムについての彼の解釈に従えば、呉の性格が強かろうと弱かろうと、「中国民族ブルジョワジーの共通の運命」という歴史の必然にとってはどちらでもいっこうにかまわない〈偶然〉にすぎず、民族ブルジョワジーとしては例外的な呉の「個性」は、彼の形象を幾分魅力的なものに見せるための文学的潤色という働きしか持ちえないはずだ。この〈典型〉的人物をめぐる議論を歴史の描写に置き換えれば、その進展を促したり、後退させたりする様々な事件も、その本質的法則に劇的な彩りをそえるための小道具でしかない。〈偶然〉的な特殊な「個性」や

「事件」が存在することはいくらかでも認めるが、歴史の〈必然〉にとって畢竟「非本質的なもの」にすぎないのである。かかる周揚の視点に立てば、如何なる歴史状況もたった一つの決定因によって方向づけられていると考えざるをえない。中国への社会主義リアリズムの導入を躊躇した周揚が、それを換骨奪胎して国防文学の急場しのぎの論拠としたことによって、彼の〈典型〉概念は、組織論と題材論を通じて、文学運動の場においてより具体的に展開されるとともに、それが抱えた問題を再生産することになったのである。

## 二

周知の如く、周揚は一九三三年十一月に雑誌《現代》第四卷第一期に発表し「關於『社会主義的現実主義与革命的浪漫主義』——『唯物弁証法的創作方法』之否定」と題する論文で、ソ連における社会主義リアリズムの提唱を「肯定的に紹介しつつも、結びで次のように書き、それをただちに中国に導入することにためらいを見せた。

これで私は、キルポーチンの提起した「社会主義リアリズム」の理論について、簡単に紹介したことになる。その提起は、疑いもなく、文学理論の一段と高度な段階への発展であり、我々はそれから多くの新しいものを学ばなければならない。しかし、このスローガンは、現在のソ連の種々の条件を基礎とし、ソ連の政治的、文化的任務を内容とするものなのだ。このスローガンを鵜呑みして、中国に応用するならば、極めて大きな危険がある。

ソ連と中国の国情の違いというもっともな理由以上に周揚をしてその導入を躊躇させたものは、既に若干述べたことがあるが（前号及び「『鏡』の中のマルクス主義—中国マルクス主義の文芸理論について—」1989年12月《世界文学》No.70）、社会主義リアリズムの幾つかの論点（創作過程における作家の世界観の働きの位置づけと、唯物弁証法的創作方法の否定など）が、プロレタリア文学陣営の論敵の議論にはずみをつけてしまうことに対する危惧であった。だが、それから三年後、周揚は〈国防文学〉のスローガンに社会主義リアリズムの観点、とりわけその創作上の關鍵たる〈典型〉についての彼の見解を忍び込ませたのである。

その中国への導入が、言わば時期尚早として見送られた社会主義リアリズム



は、八・一宣言をはじめとして抗日民族統一戦線結成の問題が、焦眉の課題としていっそう具体性を帯びて浮上してきた一九三五年下半期以降、左連を中核とする左翼文芸運動の再編が模索される中で、まず組織論の面から一つの役割を担うことになった。魯迅を介して左連に渡ったとされる蕭三のモスクワからの書簡には、こう書かれていた。

同志諸君！ここで我々は左連の閉鎖主義の起源にまで溯っておきたい。思うに、左連の閉鎖性はそのプロレタリア文学の提唱から説き起こす必要がある。なんとなれば、このスローガンが提起されるや、たちまち左連の門を閉ざしてしまい、このスローガン、この政策では、進歩的ではあるものの、いまだプロレタリア化しえないでいる文人及び自由派の作家を取りこむことができなかつたからである。とりわけ初期には、プロレタリア文学者の非プロレタリア文学者に対する態度は、謾罵ばかりで、「我が族類に非ずんば、群起して之を誅す」といった趣が大いにあった。これは、嘗てのソ連の「ラップ」の非同盟者は即ち敵というスローガンとびつたりと一致している。（『中国現代文学参考資料「文学運動史料選」』第二冊・1979年上海教育出版社）

非（プロレタリア）作家に粗暴な攻撃を加えてきたラップが解散し、「すべての作家の権利を平等にする」ことを謳い文句にソヴェト作家同盟が結成される過程で、社会主義リアリズムが前者の「唯物弁証法的創作方法」にかわる「理論」として提起されたことについて多くの言葉を費やす必要はないだろう。ともあれ、社会主義リアリズムの提起と作家同盟結成というソ連文芸界の「方向転換」を念頭に置きながら、蕭三はラップのセクト主義がロシア社会主義の文化的発展の障碍となっていたことを引きあいに出し、その「閉鎖主義」（原文一関門主義）的な「プロレタリア文学」の理論ゆえに、民族統一戦線の結成という課題に組織的に対応しえない左連の解散と新組織の結成を要求したのである。

徐懋庸の証言に依れば、「周揚は私にこの手紙を見せて、蕭三の意見に完全に同意していることを表明し、常任委員会を開き討議することを主張した」（『回憶録』）という。左連解散の経緯の詳細はともかく、ここで重要に思われるのは、国情の違いと組織防衛の観点から社会主義リアリズムの自国への応用にためらいを見せた周揚が、ソ連における文学団体の再編を一つの論拠として

左連の解散と新組織結成を要求する蕭三の書簡に、いとも簡単に「同意」したことである。確かに、彼が《現代》に社会主義リアリズムを紹介する論文を発表した一九三三年以後、中国の国情に変化が生じたことは否定できないだろう。そのために左連を解散することの適否はともかく、抗日統一戦線の結成の民族的要求にどう応えていくかが、左翼文学者にとっても重要な課題となっていたのである。確かに、そうした状況の中で、蕭三が「閉鎖主義」と指摘した従来の「プロレタリア文学」の「理論」に固執することでは、文壇に統一戦線の足場を築いていくことは不可能であった。周揚はこう書いている。

思うに、勤労大衆の文学こそが中国を救える文学であるという言い方は、当面する救亡文学の基礎と範囲をせばめ、革命文学をその友軍から引き離し、完全に孤立した位置に落としこむものにほかならない。(1936年 6月 5日「關於国防文学」《文学界》第 1卷第 1期)

周揚にとって、社会主義リアリズムは飽迄「ソ連の種々の条件を基礎」とするスローガンであったかもしれないが、ソ連の文学組織再編の先例が、「国防文学」という旗幟の下で彼が企てた文学運動再編のプログラムに一つの見通しを与えたことは、想像に難くない。だとすれば、周揚が「理論家」としてまずなすべきことは、単にソ連の先例を焼き直して目前の課題である統一戦線に便宜的に応用することではなく、嘗て彼がその変更の必要性を微塵も認めなかった「プロレタリア文学」の「理論」を左連の運動の諸側面及び中国社会の構造とあわせて徹底的に再検討することだったはずだ。しかし、統一戦線の結成という課題に応えることに急なあまりこの作業は忽せにされ、また社会主義リアリズムの下で進められたソ連の文学組織再編の意味も中国の情況に則して十分に吟味されないまま、従来の「プロレタリア文学」の「理論」にかえて、社会主義リアリズムが情況追隨的に新たな統一戦線の「理論」として密輸入されたのである。このことによって生ずる問題は、次のようなものであったと考えられる。

三十五年十二月、《時事新報》副刊《每周文学》に掲載された周立波の「關於国防文学」に、以下のような一節がある。

国防文学の旗の下では、なんとしても狭隘なる全てのセクト的な思想、感情を取り除かねばならない。全ての中国人は、許すことのできぬ極悪非道の



売国売民的な公然、非公然の漢奸や亡国奴たることに甘んじている豚犬でさえなければ、皆国防文学の陣営の戦友なのだから。国防文学陣営の中のどの友人の通行証にも、簡単にこう記されているだけである。

「私は中国人である。私は漢奸と外敵に反対する」と。

「セクト的な思想、感情」の除去を言うことは容易い。しかし、その除去を唱えるだけでは、やがてソ連において「廃止されたラップの慣習と方針のうちの多くのもの」が作家同盟の「生活と活動の基準」として復活したように（メドヴェージェフ・前掲書）、清算したはずの論理が新しい意匠の下に再生してくるのを防ぐことはできないだろう。周揚をはじめとする（国防文学）論者が、従来の運動と理論に内在的な検討を加えなかったために、運動の焦点を「階級」問題から「民族」問題に表面的に移動させただけで、その統一戦線の「理論」に彼等の使いなれた論理を持ちこんだことは否定できないように思われる。だとすれば、嘗て「プロレタリア」的題材のみが意味ある文学の対象であったように、（国防）という政治的な中心課題に則した題材以外は、取りあげるに値せぬ瑣事として文学の対象から斥けられることにならざるをえない。或は、こう言ってもいいだろう、文学者の前に置かれた踏み絵が「階級意識」から「民族意識」に変わっただけだった、と。左連の解散を伝えたある文章の以下の一節は、かかる周揚らの論理をよく物語っている。

今後、文芸界の様々な流派の複雑な差異は消滅し、残るのは、せいぜい次の二派だけであろう。一派は国防文芸、もう一派は漢奸文芸である。今後は、文芸界の煩雑な問題について、それを裁定する法律がある。即ち国防文芸という基準がそれである。今後は、「文人が相軽んずる」条件も単純になる。つまり、誰かが救国運動に参加していないすれば、彼は「怪しい」ということである。（力生「文芸界的統一国防戦線」1936年 3月20日《生活知識》第1巻第11期）

この筆者を深く捉えているのは、尖鋭な民族対立の下では（国防）に関するもの以外の文学作品、或はそのテーマに背を向ける文学者をすべて反民族的と看做す考え方であるように思われる。それは、如何なる文学的傾向も、二大階級＝「プロレタリアート」と「ブルジョワジー」の歴史的矛盾の下で両極に分解することを決定づけられているとする「階級」論の観点の再版にすぎなかつ

たのである。

### 三

「典型和個性」（前掲）において、周揚は胡風との〈典型〉概念をめぐる教義論争をこうしめくくっている。

最後に我々は指摘しておかねばならない、典型問題の提起は、中国の文学が当面する主要な任務と呼応するものだという事。国防文学は、民族危機と民衆の反帝運動によって、第一級の重要な位置に押しあげられた。文学者は、民族解放闘争をめぐる事件と人物を描写し、民族英雄と売国奴という正負の典型を創造することに努めるべきである。

周揚、胡風双方の教義解釈自体しごく退屈なものであるが、右に引用した周揚の文まで読み進むと、退屈さにもまして、払拭し難い違和感を禁じえない。他の歴史情況にもまして、〈典型〉問題が「中国の文学が当面する主要な任務」としての〈国防文学〉においてとりわけ重要な意味を持つのは何故なのか。「民族英雄」とか「売国奴」を描けと要求するだけのことなら、何もわざわざ、勿体をつけて〈典型〉論など持ち出すまでもなかったのではないだろうか。

〈典型〉概念をめぐる議論と作家に対する「民族解放闘争をめぐる事件と人物を描写し、民族英雄と売国奴という正負の典型を創造」せよという具体的な要求とを短絡させた周揚の論の運び方には、大きな盲点があったと言わざるをえない。私の考えでは、エンゲルスにとって、〈典型〉とはリアリズムを通して把握された結果であって、かくあるべきものとしてあるわけではなかった。だとすれば、〈典型〉論を些かなりとも実りあるものにする道は、〈典型〉とはこういうものだとして規定することではなく、それを錯綜する具体的な現実の対象の中から掘りおこし形象化したリアリズム文学の古典における認識の過程を理論的に把握することを措いてほかになかったろう。認識の働きなしに、〈典型〉が先験的に存在するはずがないからである。〈典型〉の存在を既に自明のこととして扱う周揚は、〈典型〉の文学的形象は集団的特色とともに個性を具えていなければならないといった技術論＝描き方に終始し、リアリズム文学における認識の構造にまで踏み込んだ論を進めることができなかった。このことは、彼が作家の認識の主体性を閑却していたことを意味しているのではないだ



ろうか。彼にとって「典型的状況の下における典型的人物」が既に揺るぎない対象として存在している以上（言うまでもなく、ここでは民族解放闘争の下における民族英雄と売国奴の戦いにほかならないわけだが）、作家の仕事は、与えられた対象を指導された通りの描き方で再現することのほかには何も残らないことにならざるをえない。リアリズム文学における認識の構造を分析する方向に彼の論を進めずに、「民族英雄」と「売国奴」こそ現在描かれるべき〈典型〉であると結論したことによって、周揚は〈典型〉論を梃子に新たな視点を発展させることができず、歴史の〈本質〉に合致した「積極的、あるいは進歩的なmomentを含んだ題材」にこそ文学の「真実性」＝リアリティーは表われるとする「プロレタリア文学」の論点を、〈典型〉論の下で繰り返すことになったのである。確かに、「正負」の〈典型〉を描けと言っているが、「国防の主題は漢奸以外のすべての作家の作品の最も中心的な主題とならねばならぬ」（「關於国防文学」前掲）のだから、アクセントが歴史の「積極的、あるいは進歩的moment」を体現する「民族英雄」の描写に置かれていることは、言うまでもないだろう。

《文学界》誌上で茅盾との間で争われた「題材の自由」をめぐる論戦は、周揚の〈典型〉概念が孕んだ上述のような問題を浮き彫りにするものであった。周知の如く、茅盾は郭沫若の「国防文芸は作家間の関係の標幟であるべきであって、作品の原則上の標幟であってはならない」という「国防・汚地・煉獄」の中の意見に賛同したうえで、周揚の「關於国防文学」に疑義を唱え、次のように記している。

例えば、周揚先生は「国防の主題は、漢奸以外のすべての作家の作品の最も中心的な主題とならねばならぬ」と述べ、更にこう言っている。「国防文学の創作は、進歩的リアリズムの方法を採用する必要がある。」このように言うと、進歩的リアリズムの方法を採用できないでいる、或はまだ採用していない作品は、国防文学となりようがないばかりか、……国防の主題を取りあげぬ、例えば日常生活或は恋愛を主題とする作家は、漢奸作家ということになってしまう。……（「關於引起紛糾的兩個口号」1936年8月10日《文学界》第1卷第3期）

茅盾の引用する周揚の「關於国防文学」で「進歩的リアリズム」と呼ばれているものは、社会主義リアリズムを指していると思われるが、或はより一般的に

マルクス主義の観点に立つ文学作品が意識されていたのかもしれない。

周揚は、茅盾の批判が掲載された《文学界》の同じ号に「与茅盾先生論国防文学的口号」を寄稿し、以下のように反駁した。

文芸上の統一戦線は最も広い範囲の作家を取りこまねばならない。勿論、純恋愛を主題に取りあげる作家も、この戦線の中に招きよせるべきである。しかし、この戦線に作家が参加するのに、義務がないわけではない。彼は民族の解放にとって有益な仕事をする必要がある。恋愛といった瑣事を主題とする作品は、読者を偉大な民族解放闘争の現実から引き離すことにしかならない。彼にいつそ意味のある作品を書くよう要求することは、国防の意義を強化するためばかりでなく、作者自身を彼が創作する瑣事の低劣さの中から脱させるためでもあるのだ。統一戦線は、教育の働きを含むべきものなのだ。

茅盾の批判は、〈国防文学〉のスローガンの下で文芸界の統一戦線を推進する周揚らの論理から生じうる問題を、周到に指摘するものだったと言えよう。周揚は、「私は『国防文学の主題は、漢奸以外のすべての作家の作品の最も中心的な主題とならねばならぬ』と述べたが、所謂『最も中心的』ということは、勿論『唯一』という意味ではない」などと弁明しているが、茅盾の疑義に対する回答になっていたとは、とうてい言い難い。統一戦線に「最も広い範囲の作家」を組織すること強調しつつも、皮肉なことに、茅盾の批判をはねかえそうと力むあまり、周揚は彼の論点の持つ狭さをはしなくもさらけだしている。換言すれば、ここで周揚は、ほとんど何の躊躇もなく、彼が賛同した蕭三のあの「手紙」で左連の「閉鎖主義」の淵源とされた「プロレタリア文学」の「理論」を繰り返しているようにすら見えるのである。右の周揚の文章は、「プロレタリア文学」の理論家として、彼がそこから少なからず示唆を受けたと思われる蔵原惟人の「芸術的方法についての感想」における「愛情の問題」を扱った作品に対する批評を連想させずにおかない。

蔵原は、「プロレタリア文学」の「題材の多様化」が言われる中で書かれた「愛情の問題」を扱った作品を批判し、「問題の核心をなすものは、これらの作家たちが『愛情の問題』を、（主要主題とされるべき階級闘争から——引用者）それだけ引き離して作品の中心的主題とすることによって、主題の積極性を喪失したことにある」、「これは小ブルジョワ的見地への著しい後退であ



る」と指摘したあとに続けて、こう書いている。

ブルジョワ作家が好んで家庭生活、恋愛生活を中心的主題にした小説を書くのは、一部のブルジョワジーにとって家庭生活、恋愛生活が最大関心事であるからだ。プロレタリアートにとっては家庭や恋愛の問題はその関心の一部ではあるが、中心の問題ではない。彼にとっては最大の関心事は階級闘争であり、したがって彼が家庭や恋愛を取り扱う場合にも、それは作品の中心的主題として取り上げられるのではなくて、全体的階級闘争の一部として取り上げられ、取り扱われなければならないのである。

「階級闘争」を「中心的主題」とせず「愛情の問題」を描いた「プロレタリア作家」の作品は「小ブルジョワ的見地への著しい後退」だとする蔵原の見解と、恋愛を主題とする作品を「読者を偉大な民族解放闘争から引き離す」ものだとする周揚の見解とは、「中心的主題」を「階級闘争」に置いているか、「民族解放闘争」に置いているかという違いを除けば、ほとんど同一の論理で支えられていたと言っている。確かに、周揚は幾分トーンをやわらげ、恋愛を主題とする作品は、読者を「民族解放闘争から引き離すことにしかならない」と書いているだけだが、言い過ぎになることを承知のうえで敢えて言えば、蔵原にとって「階級闘争」という「中心的主題」から少しでも離れることが「小ブルジョワ的見地」への「後退」を意味したのと同じ筋道で、〈国防〉を「最も中心的主題」としない作品を「民族解放闘争」から読者の目をそらすものと看做すことは、矛盾が危惧したようにその作者を「漢奸作家」と決めつけることにはならないまでも、そのような作品を書くことを「利敵」行為の一つと見ることにつながりかねないだろう。矛盾に対する周揚の反論は、はからずも「典型和個性」において「民族英雄と売国奴という正負の典型を創造することに努めるべきである」という要求に帰結した彼の〈典型〉論が、「主題の積極性」論の枠組を些かも踏み出していなかったことを示したのである。

#### むすびに

いっこうに要領をえぬまま、議論が一つの事柄の周辺を離れられず、どうどうめぐりになっているので、そろそろこの稿を終えることにするが、それにしても、現実の人間の営みの中で、何は文学の「中心的主題」たりえ、何は「環

事」にすぎないといったことが言える根拠が、いったいどこにありうるのか。先に引用した「ある種の偶然性の総計が『ヴェクトルの』本質的な『逸脱』を引き起こすと想定してはなぜいけないのだろうか」というグレーヴィチの問いが発せられた地点から裁断すれば、周揚及び同時代の共産主義者の多くをとらえていた文学理論は、ほとんど「妄念」としか言いようのないものであった。勿論、こう言い切ってしまってはみもふたもないだろう。しかし、仮に歴史の「本質」に迫る対象を描き出すことに文学の重要な役割があるという前提を周揚らと共有したとしても、所謂「中心的主題」となると彼等が考えた特定の題材（即ち「民族英雄」「売国奴」等）にのみ、それが表われるとは思えない。一見したところ些細な日常生活の一瞬の文学的描写が、その時代の人々の思想や感情の動きを我々に如実に伝えることがないとは言えない。あらかじめ、「中心的主題」はこれだと示すことは、それ自体は無意味で偶然的でしかないような様々な生活の事象の一つ一つに埋蔵されているかもしれない「意味」から作家の視線を閉ざすことにならざるをえない。既に示唆したように、こうした問題を孕んだ周揚の〈典型〉論に、自己の前に無数にひろがる対象から不可視の「意味」を掘りおこしながら作品を創造する作家の認識の主体性という視点を見出すことはできないのである。ここに胡風との決定的な分岐があったことは言うまでもないだろう。

周揚の社会主義リアリズム論の検討は今回でひとまず締めくくり、次回からは、胡風に目を転ずることにしたい。

1992年 9月25日

（附記）前号21ページの「既に芦田肇氏が指摘しているように……」という一節で、書名を書き落としていた。芦田氏の指摘は、氏の編纂した『中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録（1928—1933）』（東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊第29輯）に見られる。

